

## &lt; Exkurs &gt;

**キリスト教と形而上学の問い**

1. 問題
2. 形而上学とは何か - 無限への問いとして -
3. 存在論的な神の存在論証 - 無限の問いとして -
4. まとめ

**1. 問題**

「無限と言語」という問題設定は、宗教共通の論理を具体的に取り出すことを意図している。

(1)「無限と言語」の問題を具体的に説明するために、このワークショップでは、聖書の宗教、とくにキリスト教の議論を導入としているが、同じ問題は、ほかのタイプの諸宗教にも妥当するはずであるというのが、このワークショップの意図である。

(2)「無限」は、狭い意味での宗教の問題領域に限定されるものではない。むしろ、後に説明されるように、これは、数学や科学などにおいて問われてきた問題であり、ここに、宗教と科学との議論の接点を見いだすことが期待できる。

1. 旧約聖書・出エジプト3章は、キリスト教思想において「神の名」を考える上で、もっとも基本的なテキストであり、とくに、思想史的には、ギリシャの存在論と聖書の思惟との接点、つまり、キリスト教神学の形而上学的神論の出発点として、位置づけられるものである。

## &lt; テキスト &gt;

3:13 モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがひありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」14 神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」15 神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名 / これこそ、世々にわたしの呼び名。

2. ギリシャの形而上学的な思惟との出会いは、聖書の宗教に対して、伝統的な神理解(歴史において働き民族とともに歩む人格的存在者)にふさわしい神概念の探求を要求することとなり、それは、無限、絶対、無制約、究極、超越、永遠といった一連の概念を神に適用する試みとなって展開される。

## &lt; 参考 &gt;

1. 水垣渉 「「ある」と「あらしめる」について - キリスト教思想をりかいするための一つの試

- み - 」、『途上』25号 2003年、思想とキリスト教研究会  
2. 大石祐一「神名再考 出エジプト記三章一四節の統語論的考察」、『基督教学研究』  
第22号 2002年、京都大学基督教学会

## **2. 形而上学とは何か**

以下、こうした形而上学的思惟が、近代以降の思想状況の中で、どのように理解されて現代にいたっているのかについて、簡単に概観する。

### 3. カント: 批判哲学と形而上学(近現代の問題状況を規定するもの)

人間は本性的に形而上学的である + 形而上学的問いは人間の理論理性の能力を超えている

「人間の理性は、或る種の認識について特殊の運命を担っている、すなわち理性が斥けることもできず、さりとてまた答えることもできないような問題に悩まされるという運命である。斥けることができないというのは、これらの問題が理性の自然的本性によって理性に課せられているからである。また答えることができないというのは、かかる問題が人間理性の一切の能力を越えているからである。」「この果てしない争いを展開する競技場がすなわち形而上学と名付けられているところのものである。」(『純粹理性批判』第一版)

### 4. ハイデガー: 形而上学の基礎付けから形而上学克服へ、強い神(存在 - 神論)から弱い神へ 芦名定道「形而上学について - ハイデッガー - 」

(<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub4k.pdf>)

### 5. レヴィナス: 存在論から倫理へ

### 6. パネンベルク: 形而上学批判を経て再び形而上学へ

## **3. 存在論的な神の存在論証**

### 7. アンセルムス: 『プロスロギオン』(*Proslogion*)

「それ以上大きなものが考えられない或るもの」

aliquid quo maius nihil cogitari potest

### 8. Alfred North Whitehead, *Process and Reality. An Essay in cosmology* 1929

「思弁哲学は、我々の経験のあらゆる要素を解釈する一般的な諸観念の首尾一貫した論理的で必然的な体系を構成する努力である」(5)、「発見の真の方法は飛行機の飛行のようなものである。それは特定の観察という地面(根拠)から出発し、想像的な一般化という希薄な空気の中を飛行する。そして、新たにされた観察という地面に再び降り立ち、合理的解釈によって先鋭化されるのである。」(7)

### 9. ハーツホーン(Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967)

7 + 8:

「神はすべてを包括する実在である。したがって、神の認識はどのように全包括的であるが、それに対して、我々の認識は断片的である。それは、我々の全存在が断片的であると同様である。」(12)、「崇拜される一者を定義するために、すべてを包括する普遍的な愛という観念を使用するのは別の道が存在する。この第三の道はアンセルムスの発見したものである。」「神は凌駕されることが考えられない存在者である。」(17)、

無限・完全 凌駕不可能性

「アンセルムスはプラトン - アリストテレス的な議論を受け入れ、崇拜されるものは完結している - 完結的なものは変化できない - という意味において自己充足的で完全であると考えた。……変化は弱さの印である。……しかし、宗教的には(ましてヒンドゥー的あるいは仏教的には)、変化が単にそれだけで弱さであることを示唆するものは何もない。聖書において<完全性>が用いられる唯一の意味は、倫理の意味である。すなわち、<汝完全であれ>とは、<汝可動的(可变的)であるな>という意味ではない」(18)、「我々は、<他のものによって凌駕されること>を<自ら自身によって凌駕されること>から導出することはできない。ましてや、全体性の概念は、<自己凌駕的であること>がいかにして<他のものによって凌駕不可能であること>に結びつけられ得るのかについて、解明の手がかりを与えてくれる」(20)。

凌駕不可能性 自己凌駕可能性(比較級的神)

「神は、神にふさわしい無比の諸観点の各々において、有限かつ無限的、永遠的かつ時間的、必然的かつ偶然的である。ギリシャ人は永遠的あるいは必然的なもの自体を崇拜しがちであったが、我々はそうする必要はない」(128)

新しい形而上学の枠組みにおけるキリスト教神学の再構築(プロセス神学)  
仏教的ホワイトヘッド的有神論

#### <文献>

1. Alvin Plantinga, *The Nature of Necessity*, Clarendon 1974  
*Warranted Christian Belief*, Oxford Univ. Press 2000  
『神と自由と悪と 宗教の合理的受容可能性』 勁草書房
2. James F. Sennett(ed.), *The Analytic Theist. An Alvin Plantinga Reader*,  
Eerdmans 1998
3. 飯田隆 『言語哲学大全 意味と様相(下)』 勁草書房
4. John H. Hick, *Philosophy of Religion*, Prentice-Hall 1963

#### 4. まとめ

10. 無限から言語へ、歴史的具體性と言語

11. 無限をいかに言葉化するのか、無限を適切に捉える論理の探求 諸宗教の比較

#### <参考>

落合仁司 『<神>の証明 なぜ宗教は成り立つか』 講談社現代新書

無限集合論 神の集合論

1. 無限はその全体と部分が同一である(無限集合は自らと同一な部分集合を含む)  
三位一体論
2. 無限はその「大きさ」によって差異化される(ベキ集合、無限に「大きいもの」よりもさらに「大きな」無限がある)

神の本質と神の実存(現実性・活動性)の差異化・同一性  
受肉論(キリスト・聖霊論)